

---

## 書評

---

遠藤 薫

### 『〈猫〉の社会学

#### —猫から見る日本の近世～現代—

(勁草書房, 2023年, 四六判, 328頁, 定価3,200円+税)

京都大学 吉田 純  
Kyoto University Jun YOSHIDA

---

本書は、日本の前近代から近現代に至る〈猫〉イメージの構成を辿り、「人間中心の世界」の外部から人間の営みを相対化する「精霊」としての〈猫〉の存在を媒介として、「人新世」以後の世界のありかたを考えるための手がかりを探ろうとする著作である。

本書の構成は、そうした歴史的時間軸を縦糸とし、江戸を中心とした都市から農村や地方へという空間的広がりを横糸として織りなされている。まず第一章で、古代から江戸以前までの〈猫〉イメージの形成と変遷を跡付ける。ついで第二、四、五章では、江戸の多様な〈猫〉イメージのメディア化を、「招き猫」と「化け猫」という対照的な表象にも注目しながら辿ってゆく。さらに六章では都市の〈猫〉伝説の深層を探り、七章では江戸の〈猫〉聖地を探訪する。一方、第三、八、九章では、江戸期農村での養蚕・製糸業の発達を背景に〈猫〉が信仰の対象となったことを述べ、〈猫〉伝説や〈猫〉聖遺物の残る阿武隈川流域をフィールドワークしたのち、海の道を渡り各地の

猫島や沖縄へと旅して〈猫〉聖地の深層を探る。そして第十章では、近代以降の日本と世界の交流のなかでの〈猫〉意匠の展開を述べる。最後に「結び」では現代の〈猫〉ブームを本書の流れの中に位置づけつつ捉え直し、これからの「ポスト・ヒューマン」社会との関係を考える。

以上のように、広大な時空を自在に往還しながら、多彩な〈猫〉イメージが乱反射する情報空間を隅々まで探訪してゆく筆致は、その随所で——ひとりの猫好きにとっても、また社会学・社会情報学の研究者としても——新鮮な発見や示唆をもたらしてくれる。しかしながら、それらのすべてにわたって言及することは、限られた紙面においては困難である。以下本稿では、とりわけ評者の印象に残ったいくつかの箇所を中心に、コメントしていきたい。

まず平安期、猫はまだ稀少で、貴顕の人びとの愛玩の対象であった頃。『源氏物語』の「若菜上」に登場する光源氏の幼い妻・女三の宮の小さな白猫は、大きな猫に追われて逃げようとし、その長

い首綱が几帳の裾に絡まって居室の御簾が上がってしまう。庭で蹴鞠の催しに参加していた内大臣の息子・柏木は、思いがけず彼女の愛らしい姿を垣間見て、一瞬で運命の恋に落ちる。「もし、白猫が女三の宮の隠された心であるとすれば、一見、受身で何の考えもないように見える幼い少女が、白猫の姿を借りて、奔放な愛に向かって走り出したのだともいえる」(p.23)という著者の解釈は興味深く、魅力的でもある。だとすれば〈猫〉は、無意識の抑圧された願望の表現である、ともいえるだろうか。

この印象的なエピソードは後世に受け継がれ、江戸の猫文化にも大きな影響を及ぼすことになる。女三の宮のイメージを下敷きとして、鳥居清信、鈴木春信、喜多川歌麿らは、愛らしい猫に美女を配した浮世絵を次々と世に送り出してゆく。時代とジャンルを超えて、〈猫〉はメディア化・ビジュアル化されてゆくのである。

また「猫」は「遊女」の別称ともなり、あるいは遊女が愛らしい猫をアクセサリのように連れ歩く様子も記されている。とりわけ印象的なのは、元禄時代の高級遊女・薄雲にまつわる次のようなエピソードである。薄雲は三毛の子猫をたいそう可愛がっていたが、あまりの溺愛ぶりに周囲は心配し、猫を彼女から遠ざけようとする。それでも薄雲のそばを離れない猫の首を、親方は脇差で切り落とす。すると猫の首は空を飛び、廁の下に潜んでいた大蛇を喰い殺す。猫は日頃の恩に感じて、薄雲を狙う蛇を殺したのだった——。

この「猫の恩返し」的物語と同型の構造は、江戸期に全国各地で語られた化け猫や招き猫の物語にも共通してみられ、そこに著者は、普遍的な始原(創世)神話の構造を見出そうとする。古来、多く語られてきた蛇や狐や馬と人間との異類婚姻譚は、日本のみならず世界中に分布する普遍的な神話構造の一つであり、レヴィ=ストロースも、猫が始原神として登場するネズパース・インディアンの物語を紹介している。猫——に代表され

る、人間ならざる者たち——は、人間社会の外部、異界からの使者であるがゆえに、人間との交わりを通じて、人間社会をリセットする超越的な力を有する、ということだろうか。

一方、阿武隈川流域をはじめとして、日本各地に点在する猫碑や猫塚、〈猫聖地〉を丹念に辿ったのち、それらの地形的かつ歴史的な特徴の共通性を手掛かりとして、著者は次のような興味深い仮説を提示する。「鼠除け」の益獣としての「猫」が、「根古」という同音語を媒介として、過去の王権の勢威／葬送地の記憶と結びつき、「死者の国(浄土／根の国)」への憧れと畏怖を喚起する〈猫聖地〉として人々の心に残り続けているのかもしれない」(p.235)。「猫」と「根古」という同音のシニフィアンが、「根の国」への憧れと畏怖とに連鎖するというこの発想は、沖縄の伝統的世界観の中で、死者たちの島から共同体に到来する神が「猫」や「蛇」の姿、呼び名をもっていたという民俗学の知見(pp.253-5)とも呼応しあっている。

——以上のように、本書は、〈猫〉にまつわる豊穡なイメージの堆積を、現代ではネットミームとして拡散し、愛され、二次創作されたりもする〈猫〉イメージの背後に厚く降り積もった古層として掘り起こし、解きほぐしてゆく。直接には歴史記述とその解釈を主な内容としながらも、まさに〈猫〉という人間にとっての他者の存在を媒介とすることで、現代の人間社会を相対化する視界を開き、さらには未来のオルタナティブへの想像力をも解き放つ。その意味で本書は、〈猫〉の社会学あるいは社会情報学の端緒として読むことができるだろう。

最後に、いささか無いものねだりの願望を二点。

まず、このように〈猫〉の情報空間を自在に往還する視野が、海外とくに西洋へと広がってゆくことを、おそらく多くの読者は期待するだろう。古代エジプトの壁画の猫、あるいは近代のE.A. ポーの「黒猫」やA. ピアズリーの描くその挿絵

などは、その点景として即座に目に浮かぶ。

次に、本書冒頭を飾る27点ものカラー口絵、そして本文中に配されたさらに多くの絵画や写真は、〈猫〉イメージの不可欠の構成要素であるビジュアルへの想像力を掻き立てて余りある。ただ、紙の書籍という形式上やむを得ないことながら、白黒の小さな図版では、それらのディティールを読み取るのがしばしば困難であり、隔靴搔痒

の感を禁じえなかった。できることならば、それらの高精細なカラー画像を、本書で論じられている広範な時空間の中にマッピングしたデジタル・アーカイブがあれば、と夢想したりもする。

——以上のような願望や夢想が掻き立てられるのも、本書の社会的・社会情報学的インパクトのゆえというべきだろう。